

終戦直後の関西雑誌メディア

和田 崇

1. はじめに

近年、『占領期女性雑誌事典』1-9（金沢文圃閣，2003年6月-2008年5月）や『占領期雑誌資料大系』大衆文化編1-5・文学編1-5（岩波書店，2008年9月-2010年8月）が刊行されるなど、占領期の雑誌研究が盛んとなっている。その背景の一つとして、国立国会図書館によるプランゲ文庫の新聞・雑誌（児童書もある）のマイクロフィルム化、および早稲田大学20世紀メディア研究所（代表：山本武利）が作成した同資料の雑誌記事のデータベースにより、占領期の雑誌の閲覧が比較的容易になったことがあげられる。

プランゲ文庫の雑誌コレクションの特徴は、小規模の同人誌から新聞社等による商業誌まで、全国で発行された様々な雑誌を所蔵していることにある。そのため、これを利用した占領期の地方雑誌研究も開拓されることになった。しかし、プランゲ文庫が所蔵する雑誌には欠号が多く、とりわけ雑誌研究で重要となる創刊号の欠号も目立つことから、これだけでは各雑誌の全容を把握することはできない。あくまでプランゲ文庫の所蔵目録を参照しながら、実際に発行された雑誌を蒐集し、補完していく作業が必要である。全国の大学図書館や公・私立図書館、あるいは古書店には、まだ多くの雑誌が眠っている。

戦後雑誌の蒐集家・研究者である福島鑄郎は、「戦後の雑誌出版史でもっとも欠如している部分は地方の数々の文化雑誌である」とし、その中には「戦災や疎開のために地方に在住していた多くの作家」などが書いたものもあり、「かけがえのない貴重な資料」（『雑誌で見る戦後史』大月書店，1987年4月，56頁）であると述べている。この言葉は20年以上も前のものだが、現在に至るまで、まだ研究の俎上に載せられていない地方雑誌は多く存在する。その中には、福島の言ったような資料的価値のある雑誌¹⁾もあり、これらを発掘して「戦後」と「地方」という時空の中で意味づける必要がある。

本稿は、占領期、とりわけ終戦直後の関西の文化状況を捉えるため、終戦から1年以内に関西を出版地として創刊された雑誌を考察の対象としている。これは、1946年初頭に雑誌の創刊ラッシュが起き、終戦後の混迷の中で、関西の編集者や出版社がどのように新しい文化を発信しようとしたのか、その一端を明らかにするためである。中でも、京都と大阪、いわゆる京阪地区で発行された雑誌に焦点を絞って論じていく。

京阪地区に焦点を絞るのは、この地域に近世の三都出版（江戸・大坂・京都）以来の名残があり²⁾、出版規模において他の「地方」を顕著に上回っているからである。1943（昭和18）年の内務省警務課調べの「全国出版雑誌総数」において、大阪は「189」、京都は「168」となっており、これは東京の「1479」に次ぐ2位と3位の関係にある。もちろん、約10倍も違う東京の数値に

対し、「2位と3位」という呼び方は適切ではないかもしれない。しかし、たとえば『東北文学』（河北新報社、1946年1月創刊）で有名な宮城が「14」、火野葦平の『九州文学』（九州文学社、1938年9月第二期創刊、1946年1月戦後復刊）や大西巨人の『文化展望』（三帆書房、1946年4月創刊）で有名な福岡（典拠では福島と誤記）が「33」となっており、これら戦後に有名な地方雑誌を輩出する地域と比較しても、大阪と京都は、東京を除いて最も多くの種類の雑誌を戦前に発行していたとは言える³⁾。また、都道府県別の用紙割当量の記録から、東京が1位で、大阪・京都が2位・3位というこの関係は、同じく戦後も続いていたことが確認できる⁴⁾。

以上の点を踏まえると、京阪地区および関西を一つの「地方」として捉えるよりも、東京を除いて最も大きな出版規模のあった地域として捉える必要があるだろう。そして、戦時下の統制によって強固となったジャーナリズムの東京中心主義に対し、終戦直後の関西がそれに対抗しうる可能性を孕んでいたと見ても過言ではない。実際に、この時期の関西の雑誌は、比較的大きな資本による総合雑誌や文芸雑誌の発行が目立つ。本稿では、終戦直後の頽廃の中で、関西の出版社や編集者がどのように新しい文化を発信しようとしたのか、あるいはそれと連動してどのような文化状況があったのかを明らかにしたい。

2. 終戦直後の出版状況

各雑誌の考察に入る前に、この章では、関西の雑誌を資料として用いながら、終戦直後の日本の出版状況について踏まえておきたい。

1945（昭和20）年9月2日にミズーリ号上で降伏調印式が行われ、その3日後の「施政方針演説」で、内閣総理大臣の東久邇宮稔彦は、次のように今後の日本の進むべき道を示した。

私共は維新の大業成るに当り、明治天皇御自ら天地神明に誓はせられた五箇条の御誓文の御精神に復り、この度の悲運に毫も屈することなく、自粛自重、徒らに過去に泥まず、将来に思ひ迷ふことなく、一切の蟠りを去つて虚心坦懐、列国との友誼を恢復し、高き志操を堅持しつゝ、長を採り短を補ひ、平和と文化の偉大なる新日本を建設し、進んで世界の進運に寄与するの覚悟を新にせんことを、誓ひ奉らねばならぬと存する⁵⁾

「一億総懺悔」論の典拠として用いられることの多いこの演説の中で、引用文中に「平和と文化の偉大なる新日本を建設」とあるように、時の首相は「文化国家の建設」という新たな国策を提示した。

しかし、「文化国家の建設」という方針が示されただけで、そこに具体的な政策が伴っていたわけではなかった。舞台装置家の吉田謙吉は、1946（昭和21）年3月末に中国からの引揚船で帰国し、それから数カ月後に京阪神の闇市場を見てまわったときの様子を回想した上で、「敗戦後の日本の姿に於て特にその文化性の貧しさが見られ欠配はあながち主食食糧のそれのみに非ずして文化の欠配また黙するに忍びざる状態にあるであろう。（中略）欠配どころか何等の文化政策さへその具体的なるが示されてゐない今日の状態に於ては、無配給とさへ云へるであろう」（「文化の配給」、『社会』鎌倉文庫、創刊号、1946年9月）と述べている。東久邇宮の演説の1

年後に発表されたエッセイにおいてさえ、文化に対する政策の不備が指摘されているのである。

終戦直後の雑誌出版ブームは、この中身を伴わない国策の空隙を、民間の有志が思い思いの方法で埋めようとした結果にもたらされた。たとえば、大阪で発行された総合雑誌『真日本』の創刊号（1946年4月）で、当時発行元の真日本社の社長であった有田二郎は、「新しい日本の使命は文化国家の建設にある」と述べ、「われわれは世界の平和に貢献すべき最高の文化を建設」するために、「新しい文化を創造し、人類次代の文明を建設する必要がある」（「創刊の辞」）と宣言した。同様の趣旨は、『真日本』の他にも、この時期に創刊されたほとんどの雑誌において確認することができる。つまり、「文化国家の建設」という国策の下、その政策を雑誌をはじめとするメディアが代行しようとしたのである。

また、「文化国家の建設」は国策である反面、多くの知識人はそれを民主主義の到来として捉えていた。戦後民主主義の幕開けを告げる有名な「歌声よ、おこれ——新日本文学会の由来」（『新日本文学』創刊準備号、1946年1月）において、宮本百合子は、次のように述べている。

今日、日本は全面的な再出発の時機に到達してゐる。軍事的日本から文化の国日本へといふことも云はれ、日本の民主主義は、明治以来、はじめて私たちの日常生活の中に浸透すべき性質のものとして立ち現れて来た。

民主といふ言葉はあらゆる面に響いてをり、「新しい」といふ字を戴いた雑誌その他の出版物は、紙の弘底や印刷工程の困難をかきわけつつ、雑踏してその発刊をいそいでゐる。

百合子の言う「新しい」という字以外にも、「人民」や「文化」といった字を用いた雑誌がこの時期に次々と創刊された⁶⁾。戦中の言論統制から解放された人々は、その解放熱を民主主義と捉え、雑誌を中心とした様々な表現活動を行っていった。

しかし、人々が直面したのは必ずしも解放ばかりではなかった。ポツダム宣言の受諾に基づく、いわゆるポツダム勅令として「政党、協会その他の団体の結成禁止に関する改正勅令」が1946年2月に公布され、占領軍の政策批判や、軍国主義を鼓舞する右翼団体が取締の対象となった。大阪で発行された地方総合雑誌『文化人』第5号（1946年6月）の「巻頭言」では、「この取締が実際に政府の手で勝手気ままに行はれたとすれば」「それではまるでかつての「治安維持法」「言論、出版、結社、集会等臨時取締法」が復活したに等しい」と、この勅令に対する批判を投げかけていた。

また、占領期に発行された雑誌は全て、GHQの民間検閲部隊（CCD：Civil Censorship Detachment）の検閲対象となった。関西の雑誌から一例をあげると、『文化人』第6号に掲載予定であった長沖一の小説「砂の上」が、“suppress”（掲載禁止）となっている（図1）。「砂の上」は、1944（昭和19）年12月の和歌山の海岸部を舞台に、俘虜収容所での西



図1 検閲の手が入られた「砂の上」（『文化人』1巻6号）のゲラ（国立国会図書館憲政資料室蔵、プランゲ文庫 B336）

洋人の働きぶりや、アメリカ軍の攻撃の正確さを知っての敗戦の予兆、それでも直前まで戦おうとする人々の様子などを描いた作品であり、“criticism of allied methods of warfare”（戦争戦術に関する批評）、“disturbing public tranquillity”（社会の平穏を乱す）、“militaristic”（軍国主義的）といった理由で掲載禁止となった。

このように、1945年から46年にかけては、戦中の言論統制からの解放があった一方、占領軍や新政府による新たな言論統制も行なわれ、言論あるいは民主主義そのものの行方がある程度方向付けられていた。こうした解放と統制の「二重性」⁷⁾を捉えることが、終戦直後の雑誌を見ていく上では重要であり、次章で述べるように、この「二重性」は雑誌の内容にも反映されていた。

3. イデオロギーの中立性

この章では、終戦直後の日本が統制の下での解放という二重性の中にあった状況を踏まえ、それが関西の雑誌編集にどのように作用し特性を生み出したのか、特に編集者の戦前の経歴と戦後の状況に触れながら考察していく。

まず、『真日本』について触れたい。前章で有田二郎の「創刊の辞」を引用したこの雑誌は、1946（昭和21）年4月、大阪で創刊された総合雑誌で、実質的な経営は田中直吉・保坂富士夫の二人が行っていた。田中は戦前、滝川事件で辞表を提出したメンバーの内、若手講師陣の代表格⁸⁾で、京都帝国大学を辞職した後は立命館大学の助教授となった。戦況が危うくなり、言論統制も厳しくなる中、特高に目を付けられていた田中は危険を避けるためにと、当時立命館総長であった中川小十郎の計らいで中国へ派遣され、そこで石原莞爾と出会い、「東亜連盟論」に心酔する。後に『真日本』の編集者となる田中と保坂を繋げたのはこの石原で、彼の思想に共鳴した二人が終戦を迎え、雑誌を創刊することとなった⁹⁾。

田中と保坂の戦前・戦中の経歴は雑誌編集に反映され、その創刊号では早速「天皇と民主主義」が特集された。スポンサー有田の豊富な資金力¹⁰⁾を背景に集められた原稿は、東京の総合雑誌に劣らぬ豪華な執筆者を揃えた。特集「天皇と民主主義」の執筆者だけをあげると、美濃部達吉、里見岸雄、鈴木安蔵、今中次磨、平貞蔵、田中直吉が書いている。戦前に天皇機関説を唱え、右翼に迫害までされた美濃部達吉は、戦後は代表的な天皇制論者となり、この特集に発表した「天皇治下の民主政」においても、「我が国に民主主義の政治を実現する為めには、憲法上天皇統治の制度を支持することが、敢て妨げないのみならず、寧ろ絶対に必要」であると力説している。一方、戦前に京都学連事件で検挙された経験を持ち、戦後に憲法研究会のメンバーとなった鈴木安蔵は、「日本国民のために、つゞくべき後ちの世代のために、否、今上陛下ならびに皇室、皇子孫のためにも、国家機構・政治体制としての天皇制は廃止されることが幸福である」（「新憲法案の論点と主体」）と、天皇を儀礼的存在として認めつつも、天皇制自体は廃止した方が良く論じた。

天皇制論議に関しては、『日本国憲法制定資料全集4（2）憲法草案・要綱等に関する世論調査』（信山社出版、2008年8月）でまとめられているように、当時は様々な雑誌で扱われており、また、天皇制肯定論と否定論の対比でいえば、北海道政治研究会が編纂した『天皇制護持論』と『天

皇制打倒論』の合本（玄交社、1946年3月）などもある。しかし、他の雑誌や出版物と比較しても、美濃部達吉や鈴木安蔵など、天皇制を巡る大物の賛否両論を掲載した『真日本』創刊号は遜色がない。こうした編集の背景には、戦中に石原莞爾の東亜連盟論や国防論に心酔した田中直吉が、一方で大学の自治や学問の自由に抗議して滝川事件に連座した経験を持っていたという、ある種の中立主義的な面が反映されているといえるだろう。

また、文学作品においても、編集者の戦前の経歴が反映されている。編集人の保坂富士夫の大学時代からの友人である西川満は、台湾からの引揚げ後、保坂の手引きで東京支局長として真日本社に迎えられ、「油車街の女」（『真日本』6号、1947年2月）および「桃園の人」（『真日本』10号、1948年5月）という、台湾を舞台とした二つの小説を同誌に発表した。「油車街の女」は、台湾の小都市「鹿港」を舞台に、その街を佐藤春夫の「植民地の旅」にも登場した古物商の男に案内してもらった話である。こうした作品からは、戦中に台湾の文化建設を担った西川の、植民地台湾に対するノスタルジアが感じられる。

さて、『真日本』の天皇制論議に見られたような中立性について、もう一つ触れておきたいのが、文学雑誌『東西』である。『東西』は、戦中から教科書出版などで実績のあった弘文社が、貴司山治を編集長に迎えて創刊された。戦前にプロレタリア文学や大衆文学の書き手として活躍した貴司は、戦争末期に丹波山中の胡麻郷村に疎開し、戦後もしばらく同地に滞在して開拓運動に携わりながら、京都市内にあった『東西』編集所に足を運び、雑誌編集を行っていた¹¹⁾。

『東西』の特色は、国文学者の武田祐吉のような大家から、新進気鋭の評論家である小田切秀雄まで、イデオロギー性にとらわれない幅広い執筆者を擁したことである。それは、第2号（1946年5月）に掲載された二人の作家の書簡に最も顕著に表れている。貴司山治は、プロレタリア文学運動の同志であった中野重治、そして、魯迅と藤野巖九郎（先生）の交流を描いた『惜別』（朝日新聞社、1945年9月）を機縁として文通をしていた太宰治に手紙を送り、その返信を掲載した。太宰はその返信（「返事の手紙」）で次のように述べている。

私はいまジャーナリズムのヒステリックな叫びの全部に反対であります。戦争中に、あんなにグロテスクな嘘をさかんに書き並べて、こんどはくりと裏がへしの同様の嘘をまた書き並べてゐます。私は恥づかしくてならないのです。（中略）はにかみを忘れた国は、文明国で無い。今のソ連はどうでせうか。今の日本の「民主主義者」はどうでせうか。（中略）私はいまは保守党に加盟しようと思つてゐます。こんな事を思ひつづのは私の宿命です。私はいささかでも便乗みたいな事はてれくさくて、とても、ダメなのです。

ここで太宰は、戦前と戦後の連続性という観点から、明確に終戦後の民主主義熱に対する嫌悪感を示している¹²⁾。一方中野は、返信（「貴司への返事をかねて」）で次のように述べている。

一月二十四日に日本出版協会の総会があつた。総会は七つの反動出版屋の除名を決議した。理事会はその実行にかかつた。僕は評議員、理事に選挙された。関西で協会支部の活動がある筈だが、それに協力してほしい。出版界の革命的民主主義化は大仕事だから、よろしくたのむ。（中略）日本の文化革命はナニハブシの問題に象徴的にかかつてゐる。日本

の民主々義革命は農民の問題に象徴的にかかつてゐる、と思ふ。これは論文に書かねばならぬ。

天皇制問題を描いた小説「五勺の酒」（『展望』13号，1947年1月）や，エッセイ「そっくりそのまま」（『改造』27巻3号，1946年3月）を発表するなど，中野も太宰と同じように戦前からの連続性に意識的であった。しかし，ここでは日本出版協会が戦犯的出版社を粛清したことや，新しくできる関西支部への協力を要請するなど，戦前の言論弾圧に対する報復的措置をとりながら民主主義の建設へ意欲的に取り組んでいる様子が伺える¹³⁾。

上に引用した太宰の返信は，日高六郎編の『戦後日本思想大系1 戦後思想の出発』（筑摩書房，1968年7月）に収められる等，戦後の太宰の思想的立場を示すものとして，たびたび取り上げられてきた。しかし，雑誌研究としては，同じく戦前と戦後の連続性に意識的であった中野重治の書簡との同時掲載について着目する必要がある。たとえば，加藤典洋は『敗戦後論』（講談社，1997年8月）の中で，戦争によって侵略的行為をした日本が，戦後は占領下という「押しつけられた」状況の中で民主主義的価値観を構築していった現実を「ねじれ」とし，その「ねじれ」に敏感だった知識人の一人として，太宰と中野の名もあげている¹⁴⁾。しかし，戦後民主主義の出発に対する両者の立場が全く異なっていたことは，こうした対比から鮮明に浮かび上がってくるのである。

『東西』は前記の小田切秀雄のほか，渡辺順三や徳永直など，民主主義文学陣営の作品や論文を多く掲載した。しかし，民主主義的昂揚を前面に押し出すのではなく，あくまで編集は中立的であった。鶴見俊輔は『東西』について，こうした「左翼，右翼の紋切型におしまれない」執筆者の選び方は，「東京からはなれた丹波の山の中にいてなかば農業に従事していた貴司山治の，中央ジャーナリズムに影響されない独特の編集眼によるものだった¹⁵⁾」と評している。確かに鶴見の述べるように，関西という土地性が編集に作用した効果は大きいだろう。それを土台に貴司の編集手腕や人脈が発揮され，太宰と中野の対比に象徴されるようなイデオロギーの中立性が保たれたのである。

4. 関西雑誌と文化団体の組織

終戦直後の関西の雑誌について，もう一つ触れておきたいのが，雑誌が文化団体の機関誌的役割，あるいは文化団体とまでいかなくとも，雑誌が主体となって何らかの文化運動を組織していたことである。これは，雑誌『新日本文学』を発行した新日本文学会が代表的なように，この時期の全国の雑誌で見られる特徴だが，とりわけ関西では，関西在住の作家，そこに京都帝国大学等を中心とした学者が加わることで，比較的多くの団体が組織された。

『新日本文学』の創刊準備号（1946年1月）では，「全国に上がる文学・文化運動の波」と題して，大阪の状況を次のように伝えている。

大阪地方 この地方の文化活動はなかなか活発だ。「関西自由人クラブ」，「沿線文化人クラブ」，「関西文化人クラブ」等が生れ宇井無愁氏中心の『文芸復興』といふ雑誌が出，新しい

劇団組織の話もすゝみ（旧大阪協同劇団、児童劇場の人々も動きつゝある）、民主主義的な文学作家の結集も急がれてゐる。また関西民主々義科学者協議会が文化各分野の協議機関としてその機能を発揮しようとしてゐる。

1946（昭和21）年1月の時点で、大阪ではこれだけの文化団体が既に組織されていた。たとえば、本稿の2章で引用した地方総合雑誌『文化人』を発行した「関西文化人クラブ」（正しくは「関西文化人倶楽部」）は、**図2**のような入会申込書を雑誌に挟み、会員を募集した。この入会申込書の「発足の辞」には、「我々は東京文化の否定を取りあげる。曾ての日本文化が自らの節義を見失つた植民地文化と墮したことに、東京の犯した罪は大きい。歴史の精神から見ても関西文化が日本に於ける指導的立場にあることは明らかなことである」と書かれており、東京中心主義の文化に対する明確な対抗意識を表している。終戦直後に発行された雑誌は、ただ商業的に発行されたばかりでなく、それらを中心に様々な実践的文化運動を展開していったのである。



図2 「関西文化人倶楽部」入会申込書
（学習院女子大学高橋新太郎文庫蔵）

しかし、こうした文化団体については、当時の新聞や雑誌の記事でその結成や講演会の案内がいくつか散見できるものの、その実態については不明な点が多くある¹⁶⁾。杉山平一は、織田作之助に宛てた書簡の中で、「丁度文化人といふ雑誌から創作を一篇（詩とかいてない）下さいとの手紙がきてみました。手元に何もないし締切も廿五日といふ故、貴方に送つたものどちらか「春寒」でも東京新聞大阪支局（梅ヶ枝町）文化人クラブといふところへ送つてをいて下さいませんか。とりにいく日時がないので。（中略）文化人といふの、へんな本であること知つてゐるが、小説活字にすることはうれしいから¹⁷⁾と、小説が掲載される喜びを吐露しながらも、雑誌『文化人』のことを「へんな本」と呼んでいる。ここから、戦後に新しくできた文化団体について、その機関誌へ寄稿した作家さえも、その実態を詳しくは認識していなかった様子が伝わってくる。また、雑誌『東西』1巻3号（1946年6月）に掲載された牧野弘之「関西文化通信」では、「関西文化人クラブは、会員はすでに三千名を突破し（中略）近畿中国地方までを含めての広汎な地域にわたつて」いながらも、「しかし、その活動は、文化創造といふよりも、むしろ、会員相互の親睦連絡等に重点がおかれて」おり、「比較的専門家の参加が少いといふ弱さがみとめられる」と報告されている。

中島健蔵は「知識階級の運命」（『人間』1巻8号、1946年8月）において、当時「知識階級」という言葉に代わって「文化人」という新しい言葉が使われはじめたことに触れ、それら「文化人」の多くは若い青年層ではなく、戦前に多少なりとも自由主義の空気を吸った中年層が大半を占め、また、そうした文化団体は「有閑人」や「アマチュア」によって構成された組織で

あるため、やがて「さびれてゆく運命にある」と予言した。こうした中島の指摘は的を射ており、ほとんどの文化団体が、かつての知識人に代わる、あるいはその知識人を巻き込んだ文化運動には発展しなかったのである。

一方、大阪とは異なり、京都の文化団体は比較的組織としてのまとまりを持っていた¹⁸⁾。京都では1946(昭和21)年1月に、乱立した各文化団体の協同組織として、近代日本研究会等が中心となり「京都地方文化団体連絡協議会」(翌年9月に「京都文化団体協議会」へ発展的に改組)が設立された。そして、この協同組織には、『時論』(大雅堂、1946年1月創刊)、『詩風土』(一条書房、1946年1月創刊)、『新社会』(「新社会」社、1946年1月創刊)といった雑誌も招かれた¹⁹⁾。

総合雑誌『時論』を発行した大雅堂の社長田村敬男は、滝川事件で宣伝広報文書の出版活動を一手に引受けるなど、戦前から京都の左翼運動を支えてきた人物である²⁰⁾。松尾尊兌は「敗戦直後の京都民主戦線」(『京都大学文学部研究紀要』18号、1978年3月)において、京都の文化運動の中心を担った民主主義科学者協会(民科)京都支部の説明に際し、「田村は田畑弘(のち三一書房をおこす)・嬉野満洲雄らすぐれた編集者を擁して大雅堂より関西には珍しい評論雑誌『時論』を刊行し(一九四六年一月創刊)、民科系の人物に数多く寄稿を求めたばかりでなく、大雅堂を辞して創立した日本科学社からは民主主義科学者協会編と銘打って「学生叢書」(文庫版)を発行した」と、京都の文化運動において、雑誌『時論』や田村の果たした役割の重要性を指摘している。また、『時論』1巻5号(1946年5月)には、中西功「民主連立政府論」、細川嘉六「総選挙の結果と民主人民統一戦線」、川島亮平「民主戦線と社会党の動揺」が掲載されるなど、早い時期から民主戦線に関する特集を組んでいた。

詩雑誌『詩風土』は、一条書房を発行所、白井書房を編集所²¹⁾とし、白井書房の経営者は詩人でもある白井喜之介であった。『詩風土』は詩誌であったため、その性質上『時論』のような政治的役割は果たしていない。しかし、図3のチケットから、白井が会長を務める京都詩文化協会が主催となり、京都市文化団体協議会が後援となって文芸講演会が開催されていたことが確認できる。また、白井は他にも月例サロンを開くなど、文化活動を積極的に行っていた。『詩風土』については、同誌が目標とした詩雑誌『四季』とは異なり、その叙情主義においては実験性や運動性を持たなかったとネガティブに評されることが多い²²⁾。しかしながら、こうした草の根の文化活動を白井が行っていたことは評価する必要がある。特に、こうした活動が、市民の文化的欲求に応え、同時に文化水準を上げる啓蒙活動として機能したともいえるだろう。

このように、大阪とは異なり、京都では文化団体の協同組織が結成され、そこに雑誌の活動も加わっていた。そして、それらの活動は、後の京都民統による民主戦線の礎を文化の面から築いていったのである。



図3 京都詩文化協会主催の文芸講演会のチケット(新村出記念財団重山文庫蔵)

5. 周縁としての関西

以上のように、終戦後に全国で沸き上がった民主主義熱の中で、関西でも多くの雑誌が創刊され、また、それを母体とした文化団体も組織されていった。関西でこのように雑誌出版が盛んとなった背景には、前章の冒頭でも触れたように、比較的有名な作家や学者が関西を拠点として活動していたことがあげられる。つまり、文壇と論壇を自家生産することが可能で、そのため文芸雑誌だけでなく、『真日本』や『時論』といった規模の大きな総合雑誌も発行できた²³⁾。

こうした関西の特性が最も顕著に表れた雑誌として、外国文学を翻訳・紹介した京都の『世界文学』があげられる。『世界文学』は、織田作之助等が参加した『海風』の同人で、戦中は文芸春秋の編集局にいた柴野方彦が京都で再起を図ろうと1946(昭和21)年4月に創刊した雑誌で、2号から編集長格で伊吹武彦を迎えた²⁴⁾。戦中は海外の情報が著しく統制され、その反動による民衆の海外への渴望は、1946年6月に発行された『リーダーズ・ダイジェスト』の日本版を買い求める大行列に象徴され、情報誌と文学雑誌という違いはあるものの、『世界文学』の発行が1945年の末から企画され、『リーダーズ・ダイジェスト』の2カ月前に出されたことは先駆的な試みであった。その『世界文学』について、創刊号から訳者や筆者として頻繁に登場する名前をあげると、フランス文学では伊吹のほか、桑原武夫と淀野隆三がおり、ドイツ文学では大山定一と和田洋一、英米文学では菅泰男が登場する。顔ぶれを見てわかるように、淀野を除いた全員が京都帝大の関係者である²⁵⁾。彼らの学識は『世界文学』のみならず、たとえば伊吹が『時論』に掲載されたサルトルの「壁」(1巻6・7号連載、1946年6・7月)を翻訳し、大山が『詩風土』に掲載されたリルケの詩をいくつか翻訳するなど、他の京都の雑誌でも発揮された。

この『世界文学』は、外国文学のみならず、創刊号と第2号(1946年6月)に織田作之助の「夫婦善哉後日」を掲載したことで知られている。この作品は、有名な「夫婦善哉」の続編ではなく、高校落第後に上京した大阪出身の文学青年である「私」を語り手に、同じく関西から上京してともに雑誌を発行している同人たちの人間模様を描いており、いわば織田の『海光』同人時代をモデルとした小説である。その「夫婦善哉後日」の第2号掲載分で、「私」が次のように東京を批評する場面がある。

谷崎の言ひ草ぢやないが、東京なんてたかだか江戸三百年の残滓に過ぎないよ。(中略)万葉以来、源氏でも西鶴でも芭蕉でも近松でも秋成でも、文学は関西のものだ。(中略)東京の文化なんて、荷風の江戸趣味はまだよしとして、いや、荷風が江戸趣味にわざと隠れなくちやならんくらゐ、バラツク的で、ペンキ塗りで、つまり植地的だ。

「谷崎の言ひ草」とは「東京をおもふ」(『中央公論』49年1号-4号連載、1934年1月-4月)のことで、同じ趣旨のことを織田は「東京文壇に与う」(『現代文学』5巻10号、1942年10月)でも述べていることから、作中の「私」に自身の考えを語らせたのであろう。「東京の文化」は「植地的」であり、つまり西洋的近代化の受容と地方出身者の寄せ集めで出来た仮構物に過ぎない。文学(文化)の伝統や根源的なものは「関西」にある。それが彼の主張であった²⁶⁾。

しかし、終戦直後に関西で発行された雑誌の多くは、伝統や地方色を強調するという方法は

とらなかった。たとえば、戦中は大阪、戦後は京都で発行された『新文学』（全国書房、1944年11月創刊、1946年1月戦後復刊）がそうである。増田周子は、『『新文学』（全国書房）の大阪出版時代研究——大阪作家と編集者との交流を通して』（『日本近代文学』73集、2005年10月）において、戦争末期に同雑誌で企画された「大阪特集号」が、戦災を期に破談となり、戦後に全国書房が京都へ移ってからその特集を組まなかったために、織田作之助をはじめとする有能な大阪の作家たちが離れていった経緯を論じている。戦後の『新文学』は、4巻8-9号（1947年9月）の「編集後記」に「いまこそ関西の文化の伝統といふ、固定観念を再批判し、検討しなければならない、打破しなければならないと思ふ」と述べられているように、「関西」という「伝統」の殻を破った新しい文化を創造し、「全国文芸雑誌を関西からおこすという意図」（増田・前掲論文）を持っていた。だが、その新しい文化が何かといえは、関西という地方色を少なくして東京と同じ水準で雑誌を編集することであり、大阪の郷土芸術である義太夫を「痴呆の芸術」として論じた谷崎潤一郎「所謂痴呆の芸術について」（5巻8・9号連載、1948年8月・10月）など論議を呼ぶものを掲載したものの、独自の文化を創造したわけではなかった。

『新文学』に限らず、外国文学を翻訳・紹介するという『世界文学』の内容がそうであり、また、『東西』1巻6号（1946年11月）の「あとがき」に、「本誌は京都で編集して大阪で発行してあるのだけれど、地方的な雑誌といふわけではない」と述べられているように、これまでに触れてきたほとんどの雑誌が、関西の伝統や地方色を強調せずに、全国へ向けて発信することを企図したものであった。しかし、終戦直後の雑誌は、1947（昭和22）年の初めにピークを迎える用紙不足や電力不足、あるいはこの時期の急激なインフレによって、多くの雑誌が遅延や廃刊に追い込まれ、『東西』も1947年4月にわずか一年で廃刊している。一方、『時論』や『詩風土』、『世界文学』や『新文学』をはじめ、京都では比較的多くの雑誌が出版の困難を乗り越えて発行を継続したものの、それでも1950年代までにはほぼ全てが姿を消し、東京に代わる雑誌文化の拠点とはならなかった。

東京文化を「植民地的」とした織田作之助の表現のように、近代文化は、東京が「周縁」としての地方を内側に取り込むことで「中心」を形成し、さらに「地方文化」と呼ばれる周縁を再生産することでその地位を確保し続けてきた²⁷⁾。そして、その原動力となったのが天皇制である。ここで気をつけなければならないのは、文学（文化）の根源としての「関西」も、同じく天皇制によって担保されていたことである。つまり、近世には京都に天皇（朝廷）、江戸に将軍（幕府）がいることで二重の権力構造が存在し、そのために「中心」も二重に存在し得た。それが明治維新後に東京へ統合され、関西は「周縁」へと追いやられたのである。終戦直後に関西文化ないし地方文化が花を開きかけたのも、天皇制喪失の危機（好機）によって「中心」としての東京の正当性や神話性が動揺したからであり、そのために『真日本』も含めて全国津々浦々の雑誌が、新文化の建設とともに天皇制問題の論議を盛んに取り上げた。

では、終戦直後の関西の雑誌が地方色を強調しなかったのはなぜか。それは、関西を「周縁」として定義することを拒否する隠喩ではなかっただろうか。これに関して、『世界文学』編集長であった伊吹武彦は、同誌15号（1947年11月）の「編集者のことば」で興味深いことを述べている。

私は『世界文学』がたまたま京都で編集されているからというので、これを「京都学派」的などと批評されても、一向気にしないのと同様に、東京ジャーナリズムというものを、特に京都のそれと対立させて問題にしようとは思わない。

ここで伊吹は『世界文学』の編集者らしく、グローバルな視点で日本を一元的に捉えている。しかし、彼は東京との二項対立に関してクリアなわけではない。前号（14号、同年10月）の同じく「編集者のことば」では次のようにも述べている。

地方の小都市は、だんだん東京大阪京都など大都市の場末になつてゆく。（中略）そして東京大阪京都などの大都市も、うっかりすると欧米大都市の場末になりかねない。やがて日本全体が世界の場末になつたらもうおしまいである。

伊吹は「地方の小都市」を「大都市の場末」と称して「周縁」に据え、「東京大阪京都」を「中心」として並置している。そこには「関西」と「東京（関東）」という「対立」意識はないように見えるものの、一方で両者を「大都市」という差異のない同類項にすることにより「中心」対「中心」という対立構造が内包されている。もちろん、伊吹の私見を普遍化することはできないが、少なくとも、終戦直後の退廃の中で新しい文化を全国へ発信するに及んで、関西の出版者や編集者は関西を「中心」として自己規定する傾向にあったといえるだろう。

しかし、本稿の2章で述べたように、終戦直後の日本にはGHQという新たな権力が東京を中心として顕在し、彼らに庇護された象徴天皇制も誕生した。東京がその「中心」性を再構築する中で、関西の雑誌は「周縁」としての自己を規定し、「中心」との差異を設けることで独自の文化を発信し、形成すべきではなかっただろうか。もちろん、「周縁」は「中心」の文化を相互依存的に活性化する。だが、上方漫才がその成功例であるように、「周縁」としての独自性を蓄積することによって、関西の雑誌文化が東京を席卷する可能性もあったのではないだろうか。

付記

本稿は、日本近代文学会関西支部2011年度春季大会（6月）における口頭発表に基づいている。ご教示賜った諸氏に深謝申し上げます。

注

- 1) たとえば、終戦後の大阪で、ユーモア作家の宇井無愁等が中心となっていち早く発行された同人雑誌『文芸復興』の第2号（1946年1月）には、川端康成の「文学の心」（全集未収録）という、若者に向けたメッセージが掲載されている。
- 2) 近世の三都出版については、蒔田稲城『京阪書籍商史』（修正復刻版、臨川書店、1983年5月）が参考になる他、最近では、山本秀樹『岡山大学研究資料叢書29 江戸時代三都出版法大概——文学史・出版史のために——』（岡山大学文学部、2010年2月）の研究もある。
- 3) 『昭和十九・二十・二十一年度版 日本出版年鑑』（日本出版協同株式会社、1947年7月、62-68頁）による。1944（昭和19）年と1945（昭和20）年の数値を参照しなかったのは、1943（昭和18）年の末に「出版界の統合整理」が始まり、統合後の数値が著しく低いためである。なお、大阪と京都に次ぐ4

位は、愛知の「101」となっている。

- 4) 『新聞出版用紙割当制度の概要とその業務実績 第一 総括編』（総理府新聞出版用紙割当局, 1951年6月）。ただし参照したのは金沢文圃閣の復刻版『新聞出版用紙割当制度の概要とその業務実績』第2巻, 2004年7月)。同書182-183頁の「各年度の地域別出版用紙割当数量表」における1947(昭和22)年度の数値は、東京が「24,365,171」(単位:ポンド)、京都が「1,254,259」、大阪が「1,165,466」であり、これは4位の北海道「232,848」を大きく上回る数値となっている。
- 5) 「戦争集結ニ至ル経緯竝ニ施政方針演説」(第88回帝国議会(臨時会), 1945年9月5日)。ただし引用は、『読売報知』(1945年9月6日朝刊)による。
- 6) 関西の雑誌では、『人民文学』(兵庫:人民文学社)や『人民会議』(大阪:人民会議社), または『文化人』(大阪:文化人倶楽部)などがある。
- 7) 本多秋五は「占領下の文学」という規定の是非(『物語戦後文学史』)において、中村光夫の「占領下の文学」という規定を批判する中で、「われわれに許された自由は、たしかに占領政策のワク内のものであったが、ときにはそのワクと抵触するところまでつき進んだのであった。(中略)「占領下の文学」という規定は、戦後の日本における二重の関係の関係——解放と隷属、援助とヒモ、独立と依存、という二重性をとらえていない(岩波同時代ライブラリー版・上巻, 1992年3月, 129-130頁)と述べている。本稿では便宜上「占領期」という規定をたびたび用いているが、本多の言う「二重性」を踏まえていることをここで確認しておきたい。
- 8) 滝川事件を記念して出版された『京大訣別記念法学論文集』(政経書院, 1933年12月)の13名の著作者代表は田中直吉となっている。また、巻末の「跋」には、「編集その他に就ては主として田中直吉が之れに当った」と記載されている。
- 9) 田中直吉「思い出すまに」(『情念の人 田中直吉先生』田中直吉先生追悼文集刊行委員会, 1997年3月, 11-14頁)を参照。
- 10) 有田二郎は田中直吉の松山高校時代からの友人で、戦争中に軍への薬品販売で巨額の富を得ており、当時は東洋薬品工業株式会社の会長兼社長であった。
- 11) 『東西』の背景については、拙稿「文学雑誌『東西』 解題・総目次・索引」(『立命館文學』618号, 2010年10月)を参照願いたい。
- 12) 弘文社が当時『東西』と並行して発行した学習雑誌『新少年』に、初等科五年生の子供が、「自由主義だ民主主義といつて、近頃自分かつてなことをする人が大へん多いと思ひます」(初五 坂野小夜子「私たちの回覧板」, 『新少年』1巻3号, 1946年11月)という投書を寄せている。このことから、一般民衆、ましてや子供でさえが、太宰と同じように民主主義という戦後的価値観の急激な高まりに対し、懐疑の念を抱いていたことが伺える。
- 13) ジョン・ダワーは、「中野重治などの著名な作家たちは、日本の既存の国家機構を利用した占領体制の下で革命的な変化を実現することは困難であると率直に述べていたが、一方で、民主主義を実現するための基本的な仕組みが確実に作られつつあり、また新しい「民衆文化」が今まさに形成されつつあるという楽観的な考えも抱いていた」(『敗北を抱きしめて(上)』岩波書店, 増補版, 2004年1月, 301頁)と述べている。
- 14) 加藤典洋は他に、美濃部達吉、津田左右吉、林達夫、中村光夫、川端康成、梅崎春生、竹内好、武田泰淳、大西巨人、吉田満の名をあげている。(同書, 279頁)
- 15) 鶴見俊輔「なくなった雑誌」(『思想の科学』98号, 1978年11月)。ただし、鶴見もまた、この引用文の前に、中野重治の返信には触れず、太宰治だけを取り上げている。
- 16) たとえば、雑誌から派生したものではないが、前掲の引用文中にある「関西自由人クラブ」は、1945(昭和20)年11月6日の『朝日新聞』大阪版に「関西自由人クラブ創立総会」という記事があり、「民主主義日本建設に資する各分野にわたつての啓蒙運動を目的とする『関西自由人クラブ』の創立総会は五日午後一時から大阪中央公会堂で開催」され、弁護士の佐々木健助を議長に、会員には河上肇、滝川

幸辰などが名前を連ねていたことは確認できる。しかし、現段階の調査ではその活動実態は不明で、関西自由弁護士団が刊行した『佐々木健介君の懐思』（発行年月日不明、大阪府立中央図書館蔵）でも、同団体を設立した事実が略歴で触れられているのみである。

- 17) 織田作之助宛・杉山平一書簡（大阪府立中之島図書館・織田文庫蔵、1946年1月22日、葉書）
- 18) ただし、牧野弘之「関西文化通信」（前掲）には、N・M・B（日本民主主義文化連盟）大阪地方協議会が組織され、そこに新日本文学会大阪支部や関西文化人倶楽部、関西自由人クラブなどが参加しているとの報告がある。しかし、「大阪地方協議会」とあるように、後述する京都のような地域独自の組織ではなく、あくまで全国組織の地方支部的役割であったと推測される。
- 19) 「彙報」（『日本史研究』2号、1946年8月）および「彙報」（『日本史研究』5号、1947年9月）による。
- 20) 田村敬男の評伝については、田村敬男編『或る生きざまの軌跡—ひとの綴りしわが自叙伝—』（1980年11月）および田村敬男『荊冠80年』（あすなろ、1987年7月）を参照。
- 21) ただし、一条書房は白井書房や河原書店などで作られた戦中の統合会社（後に大八州出版に再統合）であるため、実質的には同系列の会社と見てよい。なお、13集（1947年4月）からは発行所も白井書房に変わっている。
- 22) 村野四郎「詩風土」（『現代日本文学大事典』明治書院、増補改訂版、1968年7月）など。なお、『詩風土』と白井喜之介については、荒川法勝「日本詩壇史4」『詩人 荒川法勝遺稿集』（ジャンス、2000年5月）が比較的詳細に触れているほか、新井正一郎『過ぎ去った日への一詩風土と詩季詩集と詩人達と私と』（洛西書院、2003年2月）には、総目次が収録されている。
- 23) 東北も関西と似たような状況があった。『東北文学』の初期の執筆者を見ると、宮城には東北帝大にいた仏文学者の桑原武夫、河北新報の論説員であった哲学者の船山信一がおり、他にも、秋田に帰郷していた作家の伊藤永之介、弘前に疎開していた露文学者の上田進などがいた。しかし、京阪地区と比べて広域であることや層の厚みといった観点から、関西の方がより雑誌出版に恵まれていたといえるだろう。
- 24) 『世界文学』は当初、伊吹武彦ではなく織田作之助が編集にあたと目されていたようで、「発足する思想文芸雑誌」（『毎日新聞』大阪版、1945年11月19日）では、「京都下鴨書店から、来春一月号から発刊の予定、編集は織田作之助氏」と報じられ、『東西』を編集していた貴司山治が、織田へ『世界文学』の編集の様子について執筆依頼をした書簡（「織田作之助宛・貴司山治書簡」大阪府立中之島図書館・織田文庫蔵、1946年（推定）12月17日、葉書）も存在する。
- 25) ただし、淀野隆三も戦中に家業の鉄商を継ぐため帰洛しており、戦後は高桐書院という出版社を開業して『梶井基次郎全集』（1947年12月）を刊行している。
- 26) ただし、川村湊が「大阪という植民地——織田作之助論」（『文学史を読みかえる⑤「戦後」という制度』インパクト出版会、2002年3月）で指摘しているように、大阪もまた他の地域から流入した労働者、在日朝鮮人や沖縄・奄美出身者を内包した「移民の町」である。
- 27) 以下、山口昌男の「中心と周縁」の理論を参考にしており、主に『文化と両義性』（岩波書店、1975年5月）に依拠している。

